

文献・絵画資料から見る中世の尼と尼寺

2020.11.12
The Believers ゼミ
高塚理恵子

○論文目次

| | |
|-------------------|-----------------------|
| 第1章 本研究について | 第5章 『洛中洛外屏風図』から見る尼寺建築 |
| 1-1 はじめに | 5-1 分析方法 |
| 1-2 研究目的 | 5-2 『洛中洛外屏風図』 歴博本 |
| 1-3 既往研究と本研究の立ち位置 | 5-3 『洛中洛外屏風図』 上杉本 |
| 1-4 研究対象 | 5-4 『洛中洛外屏風図』 歴博乙本 |
| 1-5 研究方法 | 5-5 『洛中洛外屏風図』の比較分析 |
| | 5-6 小結 |
| 第2章 女性と仏教 | 第6章 考察 |
| 2-1 はじめに | 6-1 はじめに |
| 2-2 中世の女性と仏教 | 6-2 尼寺の役割 |
| 2-3 家尼と官尼 | 6-2-1 尼にとっての尼寺 |
| 2-4 職能としての尼 | 6-2-2 社会にとっての尼寺 |
| 2-4-1 熊野比丘尼 | 6-2-3 尼寺の性質のまとめ |
| 2-4-2 巫女と尼 | 6-3 その他の考察 |
| 2-5 小結 | 6-3-1 中世尼寺と庭園文化について |
| 第3章 尼寺の歴史 | 6-3-2 江戸時代の尼寺と家庭 |
| 3-1 はじめに・尼寺の歴史 | 6-3-3 現代の尼寺門跡 |
| 3-2 各時代の尼寺 | 第7章 結論 |
| 3-2-1 奈良の朝廷と古代尼寺 | 結論 |
| 3-2-2 鎌倉幕府と尼五山 | 謝辞 |
| 3-2-3 室町幕府と比丘尼御所 | 図版出典 |
| 3-2-4 その他の尼寺 | 参考文献 |
| 3-3 小結 | |
| 第4章 日記・絵画から見る尼の生活 | |
| 4-1 はじめに・分析方法 | |
| 4-2 伝承 | |
| 4-2-1 『千代野草子』 | |
| 4-2-2 『中将姫絵伝』 | |
| 4-3 信仰形態・職務 | |
| 4-3-1 『善光寺参詣曼荼羅』 | |
| 4-3-2 『熊野観心十界曼荼羅』 | |
| 4-4 生活 | |
| 4-4-1 『看聞日記』 | |
| 4-4-2 『師守記』 | |
| 4-4-3 『法然上人絵伝』 | |
| 4-4-4 『一遍上人絵伝』 | |
| 4-5 小結 | |

○第1章 本研究について

1-2 研究目的

この論文の目的は、日記や絵画など、中世の尼寺にまつわる文化を整理しながら、尼寺の役割や、尼寺における尼の生活をまとめ、それらが尼寺建築にどのように影響しているかを明らかにすることである。

1-3 既往研究と本研究の立ち位置

【文献から尼寺を見るもの】

- ・牛山佳幸『中世の尼寺と尼』
- ・松岡齊『看聞日記から見える尼と尼寺』
- ・菅原正子『中世後期の比丘尼御所—大徳院の生活と経営—』
- ・大石雅幸『比丘尼御所と室町幕府—尼五山通玄寺を中心にして—』

【絵画から尼寺を見るもの】

- ・恋田知子『尼寺と絵巻—貞盛上人伝の一型—』

本研究は、既往研究で述べられていることを踏まえ、まだ着目されていない、尼寺の建築的側面を取り上げ、そこに尼僧の生活や信仰形態がどのように表れているのかを明らかにするものである。屋根や扉などの外観的特徴が、尼寺の社会的立場に、伽藍配置などの平面的特徴が、尼の生活に影響されているのではないかという予想のもと、複数の文献・絵画資料から当時の尼寺の立場、生活をまとめ、最終的に『洛中洛外屏風図』内の尼寺を見ながら、それらの予想を検証する。

1-4 研究対象

当論文で研究対象とするのは、主に鎌倉・室町時代に存在していた尼寺である。分析においては、尼寺について描かれた絵画、日記などの資料を取り扱う。

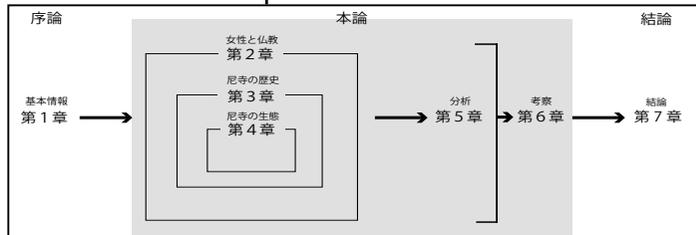


図1 論文構成

1-5 研究方法

第2章で、尼寺設立の背景となる女性と仏教の関係についてまとめる。第3章では、尼寺の歴史や分類について述べる。第4章において、絵画・日記資料から尼の生活・信仰形態・社会的立場についてまとめる。第5章で、『洛中洛外屏風図』から、尼寺の建築的側面について分析する。第6章で第2章～第5章までの記述をもとに、考察を進める。

○第2章 女性と仏教

2-2 中世の女性と仏教

古くから、「女性は仏になることはできない」という思想が強くある仏教において、女性はどのような立ち位置に置かれていたのか。奈良時代や平安時代、尼や尼寺は多く存在していたが、上記のような仏教の教えゆえに、高野山など、位の高い修行場所に立ち入ることができず、僧よりも一段下の立場に置かれていた。十三世紀から十四世紀初頭にかけて現れた新仏教の立役者たちは、総じて貴賤男女の境なく、平等な観点のもとに布教を行いはじめる。中世仏教の傾向で特徴的なのは、貴族・皇族階級の女性だけでなく、庶民階級の女性にまで仏教信仰が広まったことである。このようにして、仏の道を目指す女性が飛躍的に増えることとなった。

2-3 家尼と官尼

「家尼」は、主に家庭の中で催される仏事を担う役割を持っており、女性が担当する。家事や家庭行事の延長として、葬儀や死者への弔いを行うことが主要な業務である。「官尼」は、奈良・飛鳥時代に多く存在した形態で、主に朝廷での仏事を担当している尼僧のことを指す。聖武天皇・光明皇后によって国分寺・国分尼寺が建立され、全国に仏教信仰が広まったころ、朝廷では多くの尼僧が働いていた。このような尼たちを「官尼」と呼ぶ。それぞれ、中世以前は多く存在していたが、家庭や尼寺の在り方の変容に伴い消失した。

○第3章 尼寺の変遷

3-1 尼寺の歴史

尼寺の歴史は六世紀から始まり、飛鳥・奈良時代など、朝廷が仏教信仰を積極的に取り入れた時期は隆盛したが、平安時代に一度衰退した。しかし中世に入ると、多発する戦乱などにより夫や子を亡くす女性が増え、彼女たちのために再興される尼寺が増加した。特に、鎌倉時代後期から室町時代にかけて、皇室が住持を務める、いわゆる比丘尼御所と呼ばれる形式の尼寺が栄えた

【奈良の古代尼寺】

古代（飛鳥・奈良時代）に皇族によって建てられた尼寺が中世あるいはそれ以前に再興され、残っているものである。この時代の尼寺は、朝廷の一部としての施設と、貧しい女性の救済機関という二つの性質を持っていた。特に、国分寺が建てられ、仏教信仰が朝廷の職務に深く浸透していた奈良時代において、尼寺は皇族女性の活動を支える重要な拠点となっていた。



図2 法華寺航空写真

建築的特徴としては、本堂の別棟として新たに建立されていることや、礼拝を中心とした平面計画がされていること、建物ごとに機能が細かく分化していることなどが挙げられる。

【鎌倉幕府と尼五山】

鎌倉時代に栄え、鎌倉幕府とのつながりが強く、鎌倉周辺に多く建立された。その中でも格式高い比丘尼御所が尼五山に認定された。臨済宗派の尼寺が多かった。

| 宗派 | 臨済宗 | 律宗 | 浄土宗 | 真言宗 | 曹洞宗 | その他 |
|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|
| 寺数 | 38 | 17 | 10 | 5 | 5 | 25 |

表1 中世尼寺の宗派

【室町幕府と京都尼五山】

室町時代に入ると、中世尼寺は熟成期に入る。菩提寺としての側面が強い尼寺が多く建てられた鎌倉時代初期とは違い、主に財政的な問題が理由で、政府とつながりが強い尼寺だけの建立・存続が可能となる。そのため、必然的に皇族女性が入室する比丘尼御所の文化が栄えた。

また、多くの比丘尼御所は、入室した皇女自身が所持していた邸宅や、親族である皇族の住宅を改装、あるいはそのまま流用して利用されていた。



図3 『洛中洛外屏風図』の宝鏡寺

当時の貴族住宅は書院造で建てられることが多かった。そのため、尼寺も書院造の特徴を部分的、あるいは全体的に有しているケースが多く見られる。例えば、屋根は入母屋で、基本的に書院の存在が確認できる。

○第4章 日記・絵画から見る尼の生活

4-4 生活

室町時代の貴族社会において、尼は重要な存在であった。彼女らは尼寺内で仏事をこなすだけではなく、朝廷やその他の寺院が主催する仏教行事に積極的に参加し、また家庭内で行われる法事にも携わった。社会から隠れ、女性のみしか入寺を許されなかった尼寺のイメージとはやや異なり、交流を主にした生活を送っていたことが分かる。

例えば、『看聞日記』には、尼が、日常的に行われる朝廷の仏教行事に積極的に参加していたことが分かる記事が残されている。

法安寺二参、先御香宮参、其後寺二参、椎野・重有朝臣相伴、東御方・廊御方・上觸・二条殿・玄慶・局女、惣得・山田等如し例、宝珠庵被二聽聞、説法了入二見参一、此境居住以後初面、悦喜歎、頻被し落し涙、往昔御所二祇候之時、予年少之時入二見参一、其後只今始而見参、旧事思出言談聊述二心緒一了、年齢七十一云々……（略）（『看聞日記』応永27・8・15条）

この記事から分かることとして、当時、多くの僧尼が集まる象徴的な行事として「法華経談義」が挙げられる。法華経談義とは、宮家の皇族や、武士、そして京都周辺の僧尼が一堂に集まり、法華経にまつわる講義を聴聞する行事のような集会である。学問僧が壇上に立ち、集まった人々に対して、御経を読み、説法を行ったとされる。業師堂で行われ、皇族女性、皇族男性、僧侶、尼、貴族男性、貴族女性など、それぞれが座る席が分かれていた。また、御経の音読に比丘尼が加わることもあった。

○第5章 『洛中洛外屏風図』から見る

尼寺建築

第二章～第四章までの内容を受け、尼寺の役割を象徴している六つの要素を決定する。

①所在 ②配置 ③屋根 ④塀 ⑤装飾/建具 ⑥仕切り

①では、京都の街中並びに『洛中洛外屏風図』内でどのような位置に描かれているかを見ることで、將軍家や内裏との距離感、各寺院の位置関係から、その尼寺の立ち位置を分析する。

また②では、本堂や生活空間が敷地内にどのように配置されているかを見ることで、その尼寺が「生活の場」であるのか、「仕事の場」であるのかを分析する。

③、④では、建物の顔とも言える屋根の造りや材質、また塀の造りなどから、寺院としての格や立場を分析する。

⑤では、建物（主に本堂）に見える建具や、施されている装飾から、その尼寺の経済的な状況などを分析する。

⑥では、たびたび見られる境内の仕切りから、その尼寺の公的空間と私的空間について分析する。

この章では、『洛中洛外屏風図』を用いて、建築としての尼寺を分析する。洛中洛外図とは、京都の市中（洛中）と近郊（洛外）を描いた絵画であり、現在は十六世紀から十九世紀の作品が残されている。これらは時代ごとに作品の特性が異なるが、この章で扱うものは基本的に中世後期（十六世紀）のもので、かつ尼寺の描写が明確に確認できるものとする。



図7 『洛中洛外屏風図』 歴博甲本

| 寺名 | 宝鏡寺 | 大慈院 | 光照院 | 三時知恩院 | 曇華院 | 安禅寺 |
|-------|--------------|--------------|--------------|--------------|------------------|------------------|
| 外観 | | | | | | |
| 所在 | 左隻右 | 左隻右 | 左隻右 | 左隻中央 | 右隻中央 | 右隻左 |
| 配置 | | | | | | |
| 屋根 | 入母屋・檜皮葺き | 入母屋・檜皮葺き | 入母屋・檜皮葺き | 入母屋・檜皮葺き | 入母屋・檜皮葺き | 入母屋・柿葺き |
| 塀 | 筋帯(三本)・板葺き腰縁 | 筋帯(三本)・板葺き腰縁 | 筋帯(三本)・板葺き腰縁 | 筋帯(三本)・板葺き腰縁 | 筋帯(三本)・板葺き腰縁(重石) | 筋帯(三本)・板葺き腰縁(重石) |
| 装飾/建具 | 唐破風 | 唐破風 | × | × | × | × |
| 仕切り | 有 | 有 | 有 | × | 有 | × |

表2 『洛中洛外屏風図』 歴博甲本に見る尼寺

三つの屏風図において、左隻の右側に偏って尼寺の様子を確認できる。左隻では主に上京の様子が描かれており、將軍邸を中心としていくつもの尼寺が集まっていることは、この時代の比丘尼御所の特性を象徴している。全体を通してみると、尼寺は基本的に書院と居住空間から成っており、それらの建物は外観によって区別されていることが分かる。本堂と住宅で差異が見られる部分は、屋根、扉（建物にとっての玄関的存在）、装飾の有無などが挙げられるだろう。本堂の方は、檜葺きが使われ、また一部の寺院には唐破風による装飾が見られるなど、当時の公家屋敷と変わらないような立派な外観をしていることが分かる。

屏風図からは内観が読み取れないため、この時代の比丘尼御所の建築的特徴を、平面的なものと同観的なものに分けると、次のようになる。

【平面的特徴】

・仏事を行う空間と生活を送るための空間が混在していること ・門から直接本堂へ向かえないような仕切りが見られること ・社会に対しては比較的、生活（居住）空間の方が開かれていること ・大通りに面していること

【外観的特徴】

・公家屋敷と変わらない書院造で建てられていること ・入母屋で、檜葺き（あるいは柿葺き）の屋根 ・唐破風など、貴族邸宅で見られるような豪華な装飾 ・強固な塀の存在 ・門の存在 ・蓆などの建具の存在（一部） ・境内に見える植物（緑）

○第6章 考察・結論

世間から秘匿された隠棲の場としてのイメージが強い尼寺であるが、こと比丘尼御所においては、尼僧たちの生活が交流を中心に成り立っていたことがわかった。また、そのような、生活の場としての性質の強さが、尼寺の建物配置や、平面計画に現れているのではないかと考察できる。反面、礼拝空間は一般の寺院と比べてもプライベートな空間だったことから、私的空間と公的空間のコントラストが強い空間だったということが考えられる。

次に、比丘尼御所の外観が、一般的な寺院と比べても豪勢で、貴族・皇族の邸宅に近いことから、当時の尼寺は視覚的要素からその地位を印象付けることを意識したのではないかと考察した。尼寺の豪勢な外観は、社会的弱者である女性が集まる尼寺を、建物の印象を使って少しでも守護しようという、政府や尼僧の意思に影響されているのではないかと考えた。

○その他の考察

古代尼寺を含め、それぞれの時代の尼寺の移り変わりについて考察すると、「職場」から「家庭」へとその性質が変化していったのではないかと考えられる。

中世以前は、「官尼」と「家尼」というように、尼の種類が明確に分けられていたことから考えても、尼寺は尼僧にとって仕事場であった。しかし、時代を経るにつれ、尼寺は、選ばれた女性が働く場所から、身分の高い女性の生活の場となり、最終的に庶民女性の生活に寄り添う施設（駆け込み寺）へと姿を変えた。ただ、福祉施設としても機能していた古代尼寺、菩提寺として女性の生活の場を提供した中世尼寺の活動から考えて、各時代の社会的弱者であった女性に寄り添い、新たな生活を提供する場所としての性質は一貫して持っていたと考えられるだろう。

依然として、仏教研究においては、尼寺は「家庭」から隔絶された場所であり、尼寺に入るということは家庭内の「役割」を放棄することであるという説が中心としてある。しかし中世尼寺の性質の一部から考えるに、一概にそうとは言えないのではないだろうか。

○参考文献

- 松園齊『看聞日記から見える尼と尼寺』愛知学院大学人間文化研究所紀要(27), 1-18, 2012 09
- 菅原正子『中世後期の比丘尼御所—大慈院の生活と経営—』学習院女子大学紀要(6), 37-54, 2004
- 恋田知子『尼寺と絵巻—貞盛上人伝の一瞥—』説話文学研究(43), 25-38, 2008-07
- 恋田知子『比丘尼御所と文芸・文化』
- 大石雅章『比丘尼御所と室町幕府—尼五山通玄寺を中心に—』日本史研究(335), p1-28, 1990-07
- 池田洋子『当麻曼茶羅縁起絵巻—絵画構成に関する一考察—』
- 荒川玲子『景雲寺の沿革—尼五山研究の一瞥—』書院部紀要(28), 57-69, 1976
- 西口順子『中世の女性と仏教』法藏館, 2006
- 勝浦令子『古代・中世の女性と仏教』山川出版社, 2003
- 森郁夫・甲斐弓子『僧寺と尼寺』帝塚山大学出版会, 2012
- 西山克『聖地の想像力—参詣曼茶羅を読む』法藏館, 1998
- 『国宝 上杉本 洛中洛外屏風図』米沢市上杉博物館, 2001
- 恋田知子『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院, 2011
- 鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編『中世的空間と儀礼』東京大学出版会, 2006
- 大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教 尼と尼寺』平凡社, 1989
- 大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教 扱いと教え』平凡社, 1989
- 大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教 信心と供養』平凡社, 1989
- 大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教 巫と女神』平凡社, 1989
- 吉田一彦・西口順子・勝浦令子『日本史の中の女性と仏教』法藏館, 1999
- 澤田恵二・水野克比古『宝鏡寺(京の古寺から)』淡交社, 1998
- 西口順子編『仏と女 中世を考える』吉川弘文館, 1999
- 今東光『古都の尼寺』淡交社, 1961
- 中世日本研究所編『尼門跡寺院の世界』産経新聞社, 2009
- 中世日本研究所編『中宮寺門跡』光村推古書院株式会社, 2009

○図版出典

- 図1 筆者作成
- 図2 Google Mapより作成
- 図3 『国宝 上杉本 洛中洛外屏風図』米沢市上杉博物館, 2001, p2
- 図4 中世日本研究所編『尼門跡寺院の世界』産経新聞社, 2009, p373
- 図5 西山克『聖地の想像力—参詣曼茶羅を読む』法藏館, 1998, p4
- 図6 勝浦令子『古代・中世の女性と仏教』山川出版社, 2003, p70
- 図7 国立歴史民俗博物館『洛中洛外屏風図 歴博乙本』(https://www.rekihaku.ac.jp/education_research_gallery/webgallery/rakuchu_otsu/rakuchu_otsu_r.html 取得日: 2020.11.07)
- 表1 筆者作成
- 表2 筆者作成